

## 研究ノート

## 「ジェンダー論」の余白に

## ——「らしさ」の構造と様態

小 関 三 平

男と女の間には、暗くて深い河がある・・・と歌の文句にあるが、川幅はともかく狭くなり、橋の数もふえた。橋を渡って対岸の風景を楽しむことも、風俗を持ち帰ることも、いや、姿・形を変えて移り住むことさえ、たやすくなった。川底も、浅くなっただろう。

性別のサブ・カルチャーの間で、相互浸潤が盛んとなり、「アンドロジナス」な衣装・体型・挙措への違和感は減り、「ジェンダー・フリー」という言葉さえ飛び交っている。もはや、「男らしさ」・「女らしさ」は死語に近くなった。だが、当然、その反作用として、輪郭定かな「性的アイデンティティ」を求め、さまざまな形で生まれている。

この現実の動態を多面的に見るには、1970年以降の風俗史を遡らなければならない。だが、さしあたっては、まず、「らしさ」一般とは何かを問い、その上で、「性別のらしさ」を規定する生理的・心理的条件を探り、現代の両性の内部に生じる諸反応に、目を向けたい——そこに、<sup>エスキース</sup>試論にも至らぬこの未整理な断片の視点がある。

## I. 地位、役割、期待

一昔前には日常語だった語彙が、つぎつぎに死語と化しつつある今、性別のそれにかぎらず、「らしさ」一般とて例外ではない。が、まったく死に絶えたわけではない。「らしさ」の曖昧化は、「アイデンティティ」を含むさまざまな次

元での不安定を、もたらすからである。

「らしさ」という名詞は、国語辞典で市民権を得ないままだが、もちろん、「らしい」の俗語的名詞化である。「～らしい」とは、「～の特徴をよく具えている」・「～によく似ている」・「～にふさわしい」という意味の接尾語で、中世後期以降に生まれた助動詞「らし」に由来する。この助動詞は、上古には確信を伴った推定としての用法が主だったが、中古以降の散文では、むしろ、さほど確信的ではない「推量」に傾いた、とされる。

要するに、「らしい」との判断は、推量にすぎず、或るモデルに近似するという印象にもとづくにすぎない。そのモデルは、印象と判断の主体が持つイメージに拠る。「男らしい」という判断は、「男」というカテゴリーが持つと思われる特徴、つまりは「男らしさ」を、前提としている。

こうしたイメージは、文化の一要素として個人が学習しながら、経験を通じて確信または修正するもので、社会的に共有された「常識」・「通念」が深く浸み込んでいる。そして、この常識・通念は、行為にあたって参照される準拠枠(frame of reference)として、「らしく」振る舞わせる上での基準ともなる。

が、単なる基準には止まらない。というのも、「らしさ」が或る社会的カテゴリー＝「地位」(status, position) に結びつけられ、それに「ふさわしい」振る舞い方＝行為様式が、期待されるからである。

地位は、集合的なシステムの内に組み込まれ、他の諸地位と相関的に配分されており、それに応じた「役割」(role, part) を、個人に期待し、強制さえる。「役・割」とは、演劇から借りた訳語で、割り振られた役を指し、ドラマの実現のためには、すべての役が「相互補完的」でなければならない。つまり、「らしさ」は、一種の規範性と拘束力を、背後に伴うわけである。

他者が、その目に映る印象から、相手が属する社会的カテゴリーを推量した判断も、また、或る個人が地位－役割にふさわしく＝「らしく」行為し、それによって実現しようとする価値・目標も、さらにまた、そうした行為を意味づけ、それへと個人を駆り立てる規範をも、「らしさ」は指すのである。

或る地位がポジティブに価値づけられていれば、それにふさわしい「らしさ」は、プラスの評価を得る。「らしさ」は、主体の「アイデンティティ」や、相手の行為に対する「予測可能性」を同時に保証するという効用を、持つからである。

だが、作為や自負の過剰という印象を伴うと、「～ぶる」としてマイナスの評価を惹き起こすことにもなる。また、或る社会的カテゴリーや地位・役割そのものが、ネガティブな連想を伴うようになると、「～くさい」として、これまたマイナスの評価を受けてしまう。だから、「らしさ」の適度な表現は、「さりげなさ」や、一種の「臭い消し」を要するわけである。

「らしさ」が実現すべき期待を裏切ると、「～のくせに」と非難されたり、その「らしさ」が与えられた境界・範囲を越えて、「分をわきまえない」と判断されると、「～だてらに」と、さらに大きく減点される。もっとも、「くせに」とか「だてら」とかの国語学的な由来は、わからない。

こう考えると、「らしさ」の適度の具現は、なかなかむずかしい。極大と極小のどちらの方向へ行き過ぎても、ネガティブな裁定 (sanction) の対象となるからである。だから、「プロクルステスの寝台」にもたとえられるし、社会生活は、「らしさ」の鑄型という一面を持つのである。

もっとも、1950～60年代に社会学界を支配した機能主義 (functionalism) の役割理論は、本質的に「秩序維持」の論理に立ち、個人の自発性と能動性の位置づけが、あまりにも不十分だった。

が、社会的システムの理念型と現実には、つねに大きなギャップがある。そもそも「役割」なるものは、必ずしもその内容を明確・仔細に規定しえない。それに、つきつめれば、「役を割り振る」と言っても、その正当性の根拠が問題で、演劇の台本・演出の場合とは事情が同じではない。

役割規定の曖昧さは、役割の内実をめぐる「解釈」の多義性をもたらす。そこに、個人の主観・選択が入り込む余地があり、既成の解釈を引っくり返すこともできる。一つの役でも演じる役者で異なるのと、同じだろう。また、観客

によって期待と反応が異なるように、一つの地位に付随する役割への期待も、周囲の他者たちの間でつねに一致するとはかぎらない。

個人は、既成のシステムに満足できなければ、新しい地位－役割を創造することもできよう。既成の地位－役割だけを前提とする場合でも、自発的な選択は可能であり、強制には拒否・放棄で応えることもできる。また或る地位は、与えられるばかりではなく、能動的に「獲得」することもできる。そして、地位に就くことがたとえ他律的ではあれ、与えられた役割の実現には、「達成」の喜びもあれば、他者の期待に応えて満足させる喜びもある。「献身」と「自己犠牲」にさえ、人は、マゾヒズム的快楽というよりは、「人に尽くす」歓びを感じることができるのである。

こうして、さまざまな形で、「らしく」振る舞うに際しての自発性・能動性の余地も、残されていよう。ねぎらい・感謝・賞讃といったプラスの裁定を得るため、あるいは単なる自己満足を得るためにも、人は役割期待に応えようと「らしく」努めたり、せめて「うわべ」だけでもそう「見せかけ」ようと目する。「男立て」のため命を賭ける者も、かつては珍らしくなかった。「らしさ」には、ポジティブな「自己呈示」も含まれるわけである。

## Ⅱ. sex、gender、性

性別の「らしさ」とて、両性の相互補完という理念に即せば、社会システムにとっての機能的合理性を仮定してのことだった。両性それぞれのサブ・カルチャーの相補性をめざすかぎり、「ダブル・スタンダード」も必要だったのである。

だが、もちろん、システムを支える価値と理念も、したがって「らしさ」の規範性も、相対的・可変的であるにすぎず、また、その如何にかかわらず、役割と期待そのものが、もともと、規定と解釈の多義性をまぬがれない。だからこそ、社会と文化は、動態を保ち得るのである。

とりわけ、性別の「役割」なるものは、高度に機能的な組織内でのそのよ

うな、明確な限定を伴わない。そのミニマムな必須条件は、生殖器の構造と生殖機能における両性の相補性にすぎない。性別の「らしさ」の基底を支えるのが、この生理的な次元の分化としての“sex”——とくに狭義のそれである。

もちろん、狭義の sex 概念と性別の「らしさ」とは、まったく同じではない。後者は、前者に由来または随伴すると解釈される、或る特徴的な傾向を、漠然と指すからである。解剖学的・生理学的な所与そのものでなく、容姿・外装・動作、感覚・思考など——そうしたさまざまな要素が、性別の「特徴」として差異化されてきた。しかも、「らしさ」は、先に触れたように、近似性と推量という相対性をまぬがれず、「らしく」振る舞っているつもりの当人と、「らしい」と外から判断する他者の、双方における主観性の制約をまぬがれない。「セクシュアリティ」は、そうした曖昧さを含む概念である。

他方、“gender” 概念は、“sex” の語に含まれる一部の共示作用を嫌うフェミニストが、新たに普及させたものだが、これは、むしろ、歴史的に形づくられる性別の社会的位置づけを指している。それこそが性別の「らしさ」を規定する、という前提がそこにはあり、また、sex の差異を gender の差別に転ずる論理への批判をも伴ってきた。「ダブル・スタンダード」批判や「ジェンダー・フリー」論は、そこに由来する。

だが、gender 論は、sex 論との違いを強調するだけでなく、「性差」の否定へと傾き、結果として、sex と gender の関係への掘り下げを怠ってきた。また、同性内部の多様性や対立を生む心理的な条件に、十分な注意を払ってこなかった。フェミニズムは、多くの貴重な成果を社会にもたらしてきたが、両性の過去と現在の一面を強調して、両性間や同性内部の多面性と、対立する諸要素の相互浸潤と葛藤を、視野に深くは収めていない。

もし、sex が広義に解され、言わば、その多元的構造がとらえられていたら、gender の問題は、そこに収めることができただろう。人間が「心身相関的」(psycho-somatic) な存在であり、しかも、その相関は社会・文化の歴史的な場に規定されるから、sex は、少なくとも、身体-社会-心理 (physico-

socio-psycho) の三次元を含む、と解すべきだろう。が、19世紀末に分立した「性科学」(sexology) とフェミニズムは、20世紀の10年代の「性革命」説や60年代の「ウーマン・リブ」を例外として、互いに疎隔したまま、今日に至った。

「性」という語を“sex”の訳に用いたのは、漢語の伝統から離れた選択である。だが、「セックス」＝「性」を、上で触れた広義・多能的に解すれば、漢語本来の意味とも重なり合う。なぜなら、まず「生」の字は、身体に支えられる生命活動という生理的次元の認識を示し、その扁に「心」の字を加えることによって、心理が生理によって先天的に規定されるという観念をも、表わすことになった。ただ、そこには、社会的な地位と役割の性別分化という観念は、含まれない。後者は、むしろ、gender 論が関心を向けるところである。

他方、“gender”は、古代印欧語に発した「文法上の性」の意で、フランス語の“genre”から英語に入ったものだが、その語源はラテン語の“genus”とされる。それは、kin、kind の意味だった。“gene”(遺伝子) のギリシャ語源「ゲノス」にも通じるところがある。

とすれば、sex と直接には関係がなさそうに見える。だが、古代印欧語族は、すべての事象に sex の別のアナロジを見た。それは、まず陰・陽の二気を想定して、sex の別をもその具体例の一つと見た古代漢民族とは、事情が違う。なぜ、印欧語族がそこまで sex にこだわったのか、わからない。gender 論の抬頭も、実は、そのこだわりの裏返し、その反動かもしれない。が、“secre”＝cut, divide に発する sex もまた kin や kind と同じく、分類のカテゴリイだし、また、前者なしには後者も成り立たない。

このように原義に遡れば、sex (雌雄) や gender の概念が、分化と種別という集合的カテゴリイに重きを置くのに対して、漢語の「性」は、むしろ、身・心を個別別に見て、それぞれに内在する潜在的な傾向性 (readiness) の発展と継承に、関心を向けていた——と言えるかもしれない。

もともと、「性」は「心」の作用を基本的に規定する「本然」の「素質」を

指した。但し、身体の生理という要素への関心は、やがて、「氣」の概念にとって代られる。そして、心の在り方を左右する「性」と「氣」の関係は、古代以来、漢民族の哲学の一貫した根本問題となる。もちろん、そこに「天」の概念が、係わっていた。その集大成が、程・朱の学にはかならない。中国の哲学史でつねに最大の問題とされたのは、先天的な素質と後天的な陶冶の関係であり、それが、きわめて倫理的な関心を伴ったのである。

つまり、「性」の語に本来は表われていなかったはずの、社会的な次元が、むしろ関心の焦点となってゆく。それを集約するのが、君／臣、夫／婦、親／子の別を含む「分」の思想だった。天分・本分、身分・職分——すべては、そこに還元される。「天」の与えた分の実現は、後天的な陶冶を求めるが、それはとりもなおさず、先天的な「命」の自覚、それへの回帰だ、とするのが主流である。

男・女の別は、陰・陽の生理の対比が心理の対比を伴い、その二重性が、さらに、社会的な地位－役割の対比と重ねられる。こうして、gender 論の先駆と言うべき儒教版の三位一体が、形成される。もちろん、それは、社会システムに必要な相互補完の関係と、みなされた。それも含めて、すべては、「道」あるいは、のちには「理」の顕現と考えられたのである。

「三従」説は、前漢時代にはすでに編まれた『儀礼』に現われ、後漢に至って班昭の『女誡』が書かれたから、漢民族の父権制の前史は、それよりさらに遠く遡れよう。バラモン教やユダヤ教の世界とて、同様である。

但し、女媧や西王母の伝説にその痕跡が残るように、漢民族もまた世界各地の他の民族と同じく、強力な「地母神」を崇拜していた父権制以前の永い歴史を、持っていたにちがいない。ユンクの無意識論に言う「太母」の原型は、普遍性を持ちそうに見える。

漢民族の母権制を想定させる痕跡は、孔子の父権思想の対極に在る老子の「玄牝<sup>ひん</sup>」説にも、うかがわれる。彼はまた、「剛」＝陽に対して「柔」＝陰が、「強さ」においてまさるとも言う。「陰陽」説そのものが、「陰」を前に置いており、

「雌雄」の場合も同様である。「夫婦」と「夫」が先に置かれるのは、おそらく後代になってからだろう。

古代の和語では、「め・を（と）」・「いも・せ」というふうに、女が男に先立って対を成していた。そこへ漢文化の父権思想が移植されて、順序が逆転するが、今でも「夫婦」を「めおと」と訓む。国家形成期に女帝を輩出したことも、記・紀の編纂に際して、「あまてらす」を主神と位置づけたことも、暗示的であり、太陽神が女神である例は世界でも珍しいが、当時は女帝を戴いていたという背景も、見逃せない。だが、人間の認識の発達過程から類推しても、考古学の成果から見ても、「天」＝父神の観念に先立って、「地」＝母神の観念があったと考えられる。

もっとも、インド仏教を漢民族が受容するとき、その父権思想が強まったことは、明らかなし、仏教の一部經典に拠って、「変<sup>じょうなんし</sup>成男子」説が平安朝の日本に根をおろしたことも、たしかである。

だが、男性貴族に必須だった「からごころ」に対して、女房文化は「やまごころ」を産み出した。「ますらを」と「たをやめ」という性別の対比は、すでに万葉集に例が見られるが、それらには、格別に強い価値的共示性も優劣差も伴わない。平安朝では、むしろ「たをやめ」が文化的創造をリードし、男性貴族もそれに学ばねばならなかった。これは、すでに周知の常識である。

儒教の日本的受容は、朝鮮半島のそれとはかなり違って、あまり徹底したものではなく、陰陽思想の二元論も、そうだった。聖徳太子以来重んじられてきた「和」の観念は、儒教と老・莊思想では違いがあるが、日本的な「和」は、対立による合成よりは、対立そのものを「やはら」げる「ばかし」に力点があるろう。話を少し拡げすぎたが、genderの比較文化史は別の機会にゆずろう。

### Ⅲ．性比、性差、身体

性別の「らしさ」への社会的圧力は、両性それぞれの「特質」についての或る判断に、由来している。異性一般や同性一般をめぐる個人の認識は、あらか



じめ予先観念としての「常識」に影響されながら、個人的体験の累積を通じた吟味を加えたもので、多少とも過剰に一般化される。「女というものは」とか「男というものは」といった判断がそれである。

その一般化は、情報と体験から帰納されたものだが、対象となる両性の行為とその内側に潜むと見える心理は、歴史と個人差という相対的要素によって、複雑に規定された結果にすぎない。しかも、個人の体験は、印象というあやふやなフィルターを通して、判断を生むのである。

だが、確かなのは、両性それぞれの身体の相違＝狭義の sex だけでしかない。gender 論も性心理学も、つねにそこに立ち帰って、先述の三次元間の関係を、探るべきだろう。身体の性別がなくならないかぎり、「性差」問題は残るのである。

男尊女卑型の性別役割論の永きに亘る支配は、フェミニズムによって致命的なダメージを受けた。その批判に、フェミニズムが力を傾けてきたのは、当然である。だが、それだからと言って、身体的次元を、無視するわけにはいくまい。それを避ける分、同性の多数派に対する説得力さえ、制約されてしまうのである。

一部のフェミニストの身体軽視は、ポルノグラフィやミス・コンテストへの過剰な反応にも、表われていよう。だが実際には、女性のみが持つ身体の美なり性的魅力なりを、誇りとし武器とする女性は、多いのだし、身体の相違がなければ、「異性」としての存在理由はなくなる。なぜ、「知性」や「精神」を優位に置いて、「肉体美」を否定したり、「性的関心」を抑圧するのだろうか。身体美の表現は、知性や人格性と競合しない。「見かけで選んで、なぜわるい」という CM があったが、「フィジカル」や「フィギュア」への関心は、「ファッション」への関心と根を同じくしてもいよう。

「らしさ」は多元的なものだが、或る面での「らしさ」の希薄化は、他の面では、むしろ、その反作用ないし補償行為 (compensation) としての「らしさ」を、求めさせるかとも見える。その表われの一つが、「ボディ・コン (シャ

スネス)」であり、ダイエットもまた、単なる健康上の必要に止まらず、異性のまなざしへの配慮を欠いてはいまい。視覚メディアの発達には、他者の視線への意識を強め、「らしく」見せる演技をも磨かせるのである。「コス(チューム)・プレ(イ)」も、そうした演技化と遊戯化の表われだろう。

社会現象を担う行為主体の性別比率＝「性比」もまた、genderの歴史的・社会的要因だけでは説明しきれぬ「性差」の根深さを、示唆しそうである。因果的証明はむずかしいが、少なくとも相関関係の継続が、性差の無視をためらわせる。その最たるものは平均寿命・犯罪率・自殺率などの長期的な男女差である。そこから推量される生物学的な意味は、男が女よりも「もろく」て「不安定」であり、攻撃的だが、また同時に脆弱でもあることを、示していよう。弱いから攻撃性へと短絡するとも、そうした短絡性こそが弱さにはかならない、とも言える。

染色体とホルモンの相違は生殖器を分化させるが、その本来の機能は、もちろん、子を産むための相補的協働にある。ごく一部のフェミニストは、「母性」の否定にまで至ったが、これは、妊娠・出産・育児の負荷を「分担」しない男への批判か、または、その負荷を担うこと自体への拒否を、その動機としていよう。これも、人類の進化史上に生じた、或る特殊なフェイズであり、社会生活の変化という文脈が背景にはある。だが、母性を否定する当人も、子宮を体内に持ち、メンスのリズムからは逃れられない。

子を産むことには、圧倒的多数の女にとって、苦しみを上廻る喜びがある。それは、男には禁じられた女だけの「特権」とさえ見える。女性精神分析学者・ホーナイスは、男たちの仕事や遊びへの情熱を、子を産めない不利・劣等感に対する補償行為と解釈する。他方、彼女の師たるフロイトは、芸術や学問にリビドーの「昇華」を見たが、それへの関わりの男女差は、とくに論じはしなかった。また、戦争その他の暴力的行為を、男の愚かさ・罪深さとして責める女たちも多いが、それらへと男を駆り立てる生物学的要因までは、深く掘り下げはしない。だが、上のさまざまな現象が、すべて歴史的・社会的な条件だけで説

明できるとも思えない。そこに、男の宿命的な与件としての劣等感や不満が潜在する可能性も、否定できまい。

外生殖器の形態と機能は、心理次元での性別の「らしさ」を、規定しえよう。凸型の男性生殖器は、外部空間にさらされて突出し、精子を放散するが、凹型の女性性器は、身体内部に秘められ、空洞を抱え、そこへと男性性器を引き入れ、無数の精子を子宮へと導き、その一つだけを卵子に選ばせる。一方は、遠心的で攻撃・放散・浪費へ、他方は求心的で防禦・吸収・貯蔵へと傾く。そのかぎりでは相補的で、互いに依存し合い、どちらが能動的とも優位とも言えない。破爪は前者に委ねられるが、後者はそれへと誘うことができる。

性的快感の深さと存続は、女が男にまさるだろう。それは、性感帯の分布とオーガズム曲線から見て、明らかである。また、妊娠に伴う充実感、永く体内で養い出産の苦痛に耐えたあとに、我が子を眺めたときの歓喜、授乳の快感——これらすべてが、「父」となる男には、とうてい味わえない。その意味では、「母子」と「父子」の関係は、決定的に異なり、隔たるものである。「母性」たる充実感・達成感を味わえず、そのネガティブな側面ばかりを強調する者は、圧倒の多数の眼には、不運な例外としか映らないだろう。但し、心ならずも、または、あえて母性を捨てた者には、それに代る喜びもあるから、しょせんは、価値選択の問題である。

生命体としての男の弱さは、さまざまな医学的データによって、ますます明らかになってきた。女が男に劣るのは、筋肉の比率と瞬発力、したがってまた、破壊力＝暴力ぐらいなものである。そもそも、男が生まれるにはY染色体とそのTmf遺伝子が必要だが、女はX染色体が二つあればよい。しかも、Y染色体はX染色体よりも小さく、構造・機能とも単純だという。また、左・右の脳の働きは、男が一方に偏りがちなものに対して、女では、両方のバランスがとれているとされる。さらに、女の体型は、子どものそれにいっそう近く、幼形成熟（neoteny）の現象に似て、進化の可能性をいっそう多く残している、と大島清は言う。

そこで、男は、一種の「自然からの逸脱」とも見え、「不完全な女」とも評されることになる。ただ、人類の進化の過程で、対象を分節化する思考や、複雑な観念の世界を、造りあげてきたし、また、或る段階以降、父権制の普及により、社会生活における一種の「特権」と「ノウ・ハウ」を、今に至るまで手にしている。だが、それにもかかわらず、生物学上のハンディ・キャップと、女への潜在的な畏敬・畏怖を持ち、それを補い、あるいは隠そうとして、「虚勢」を張り、「女・子ども」への優位を守ろうとしてきたのかもしれない。但し、それは、推論の域を出るものではない。

これらを見るかぎり、「弱者よ、汝の名は女なり」というハムレットの台詞は、事実と反している。もし、社会的な地位による規定を重視するのが gender 論なら、有利なはずの平均的な男性が「もろさ」を示していることを、どう説明するのだろうか。

多くの性比が、両性間の社会的関係の変化にもかかわらず存在するなら、性の差という生物学的な要因を、無視できなくなる。gender 論を sex から切り離すことの誤りが、ここに露呈する。もし、sex の相違を否定すれば、深夜労働・生理休暇・軍隊勤務における女性への配慮も、論拠を失ってしまう。それらとて、生物学的条件に社会的役割を関連づける必要を、示すのである。

だが、性別そのものは客観的でも、「らしさ」は、可視的な容姿・動作などがもたらす、他者の印象の問題であり、意図的または無意図的な表現の、客観的な結果である。それは、「らしく」振る舞う意志とも、その結果への主観的な判断とも、別の事柄である。

性別の「らしさ」の基本的要素は、可視的な体型と第二性徴にはかならないが、それら全体がもしだす相違と言えば、曲線的な「柔軟」性の程度に尽きるかもしれない。それを、古代中国の二元論は、「柔」＝「弱」と「剛」＝「強」の対比としたのだった。だが、確かなのは、脂肪／筋肉の比率の平均値に差があるだけの、相対的な程度の問題であり、それだけならホルモン投与で変りうるものが、現代ではわかっている。

上記の二元論の最大の誤りは、「柔」＝「弱」の等式にあり、先述のさまざまな対比からすれば、「女らしさ」の一要素としての「やわらか」さは、生命力の「したたか」と共存しており、「柔」と「強」には、相互規定の作用さえありうるのである。老子は、「柔弱」は「剛強」にまさる、と言い、その象徴を、形も音もなくすべてを浸蝕する「水」に、見たのだった。やわらかさに弾力性が伴えば、それは「たをやか」・「しなやか」になる。

たとえ「ますら<sup>め</sup>女」化しようと、男装し、男言葉を使おうと、また、口紅を塗らずスカートを捨てようと、女性の解剖学的条件は変らない。筋肉に対する脂肪の比率は男性より高く、体型は丸味を帯びて、動作も柔かい。そこから生まれる「やわらか」と「しなやか」さは、女性の長所・武器たりうる。

もっとも、身体の柔軟が、そのまま思考の柔軟を伴うとは限らないが、もし、やわらかさ・しなやかさが、女に特有の心理的特徴の一面とすれば、それは、先述の左・右両脳のバランスよい機能や、全身の五感で対象を感受・認識する能力と、無関係ではないのかもしれない。

日本文化が、しばしば「女性的」と言われるのは、そうした、曲線的なやわらかさと、「まろやか」さ・「なごやか」さを指していよう。この点にこそ、日本文化の中核的要素ともいうべきものを形づくった平安朝の「やまごころ」の個性があり、永い武家支配の時代にも底流となって浸潤し、「猛き心をも和らげ」てきたものである。その意味に限れば、日本文化が「女性的」と言ってもよいかもしれない。が、この問題は本稿の範囲を越える。

#### IV. 状況・気分・反応

身体の性別が心理に作用を及ぼす可能性は否定できないが、その両者と社会における性別役割との関係は、まだまだ明らかにされていない。そもそも、心理は、文化的な要因を含む無数の要因に左右されるから、生理的要因のみを分離・抽出することは、きわめてむずかしい。

ただ、過去を背負った現実には、「通念」としての「らしさ」がまだ一部は

生きており、それを準拠棒として「らしく」振る舞わせようとする圧力と強迫観念も、無視できない。その内容の手掛りの有力な一つは、国語辞典の類だろう。

試みに、『大辞林』で「男らしい」の項を開くと、「性質、態度、容姿が男であることを感じさせること」とある。これでは説明にならない。そこで、「男性的」の項に転じると、「雄々しさ、強さ、潔さ、積極性など」がその条件とされている。そして、「男ぶり」では「堂々とした態度」、「男まさり」では、「気性が強く、しっかりした」という言い換えが、それぞれなされている。なぜそうしたイメージが定着したのかを問うと、厄介すぎるので、ここでは省くが、これに近いものが、今もなお、両性いずれものの心理の内に、多少は残っている。だからこそ、フェミニストも苛立つわけである。

けれども、国語辞典の説明は、つねに現実の変化には一步遅れざるをえない。実際には、とりわけ日本では、いくつかの特殊な条件も重なって、上記のような「男らしさ」を感じさせる男は、ますます減っているし、また、「理念」や「当為」としての規範性も、ほとんど無効化しているにひとしい。辞典は、古くなった男性的サブ・カルチャーから、或る中立的な判断を帰納しようと努める。だが、それは今や、少数現象にしかあてはまらない。恐らくは『平家物語』の背景をなす時代から厚くなった性別のサブ・カルチャーの壁は、あちこちで崩れ、ボーダーレス化している。

但し、そのボーダーレス化は、なお、部分的に止まっている。それは互いに部分的に浸蝕し合う形となり、境界線があちこちで曖昧になった「巴」模様にも、たとえられよう。あるいは、陰（黒・青）と陽（白・赤）をそれぞれ勾玉<sup>まがたま</sup>状に描き、一方の膨らんだ部分を他方に食い込ませる、「太極図」にも似ている。それも、朱子学の太極図になると、陰・陽が互いに相手方の内に飛び地を持つ「陽中の陰」・「陰中の陽」を認め、いっそう複雑な相互作用を表わすから、その方が比喩として適切かもしれない。

ひとしきり流行した「ユニ（モノ）・セックス化」とか「アンドロジニイ化」

とは、この「まだら」風の相互浸潤を指したのだった。だが、もちろん、人類が「無性」に戻ることはむずかしそうだし、「雌雄同体」は植物学の用語にすぎず、人間に「両性具有」があるとすれば、男・女のどちらとも決しかねる中間型＝「半陰陽」だけである。現代で「アンドロジニイ」と呼ばれるのは、容姿・衣裳・風俗の一部が、異性のサブ・カルチャーを模倣しているにすぎず、プラトンの伝えた神話の「アンドロ・ギュノス」＝「めを」とは、本質的に異なる。比喩としても、あまり適切とは思えない。両性の身体的な対立・相補と対等の価値・能力をバランスよく重んじる意味では、雌雄同体の実現が不可能な個体レベルよりも、むしろ、文化全体のレベルに適用した方が、よからう。

古くからの性別の「らしさ」は、それを直ちに性別そのものと結びつけることに問題があり、それぞれの「らしさ」がどちらも今なお、社会の望む価値・美德を表わしているのである。ただ、これまでの「男らしさ」が女にも、「女らしさ」が男にも、体現されつつあるにすぎず、もともと、身体上の性別とて、個体の性ホルモンの分泌による程度差を伴う、グラデーションは避けがたい。しかも、社会生活を含む文化的変動によって、これまでの人類になかった生理的变化さえ、ありうるのである。

性的アイデンティティの曖昧化は、とりわけ男性の側に、新たな困難をもたらしている。女性文化のフロンティアは拡がる一方で、その新たな学習も積極的な「希望」を伴うのに対し、男性は守勢に立ち、女性の変化への「適応」を迫られる。もはや、筋肉や瞬発力の効用は、労働形態の変化とともに、いちじるしく減少した。そして情報産業やサービス産業は女性の労働力と消費需要にますます依存し、女性たち本位へとシフトしつつある。

こうした状況で、変化する両性関係に不適応な男性の間には、活力ある積極的な同年代の女性を避けて、支配欲を満たせそうな少女に接近する「ロリータ・コンプレックス」や、対等的人格相互の関係を築けぬと見える女性への内攻的な劣等感から、嫉妬や怨恨、そして陰湿な報復に向かうレディネスが、潜在

し始める。この「めめしさ」は、伝統的な「たをやめ」のしなやかさも持たず、硬直して「キレる」ことの容易な、暴力的破壊性を伴いもする。

女たちは、こうして、新たな自己防衛の知恵と技術を求められる。おおらかに振る舞う結果が、意図とは係わらぬ潜在機能 (latent function) として、「うらみ」を買ってしまう恐れがあるからである。

既成の性別の「らしさ」のイメージは、急速に色あせた。この皮肉な歴史の弁証法は、男たちが発展させたテクノロジーと産業構造の変化によって、生じたのである。だが、身体の性別は変らない。「女らしさ」の崩壊は、女の可能性を拡げたが、「男らしさ」のそれは、男の性的アイデンティティをゆり動かし、しかも自らを「守勢」に立つと感じさせて、にわかに変貌した女たちを意識して、心理的な「萎縮」や「落ち込み」(depression) をさえ、示し始めたのである。

だが、女たちの間でも、新たな当惑や不満が生まれなかったわけではない。気分の高揚に見合う活動の場の乏しさへの苛立ち、言うまでもないが、それに加えて、男たちの「やさしさ」と「扱い易さ」が増したのと引き換えに、「たくましさ」と「頼もしさ」が求められにくくなったからである。この不満は、女の要求水準が、一段と高まった結果でもあり、男に対する支配可能性の強まりへの、半ば無意識の自信を伴ってもある。

両性の個人心理は、その都度の個別的感情の基底に在って持続的なトーンを色づける「気分」(mood) にも、規定される。そして、それは、個体の周囲を包む「雰囲気」(atmosphere) に浸透される。この漠たるものは、「社会心理」の重要な一部を成すものである。

性別の気分は、これまでの gender 論が軽視してきた側面の一つだが、ここに、新しい歴史的変化としての、いちじるしい男女差が示される。それは、一般的な傾向として、女性の気分が上昇・高揚、男のそれが下降・沈滞へと、ヴェクトルが逆の方向に働く——という形で表われている。もちろん、「女性差別」がなくなったわけではない。ただ、シーソーの傾きと力の方向性が問題なので



ある。この一種のシェーレ現象の交差点は、おそらく70年代の半ばにあったろう。その時期に起きた社会現象の数々は、あえて振り返る必要もあるまい。この頃から、明らかに、世代の差はあれ、活力と能動性において、男と女は逆転したのだった。

いずれにせよ、性別分業のダブル・スタンダードは、確実に崩壊しつつある。だが、それは部分的にすぎない。両性それぞれに異なる性的アイデンティティを求める女・男は、存在しつづける。

「ますら女<sup>め</sup>」にもサブ・タイプがあり、「より強い」男性を求めるか、「たをや男<sup>お</sup>」を求めるかの違いがある。「たをや男」の側でも同様であり、いっそう禦しやすそうな「たをやめ」を求めるか、「ますら女」への隋順に喜びを求めるかの違いがある。選択の幅が両性ともに一挙に拡がったのを、よしとすべきだろう。

当然ながら、性別のサブ・カルチャーには、さらにさまざまな分化と差異化が含まれ、同世代の同性の間にも対立と葛藤がつねに存在する。女たちにも、過去の評価をめぐる姿勢・視点の対立がある。一般に、gender論は、それを軽視して、一面のみを誇張し、あるいは、理念と現実の矛盾を深く見つめない。

いかにフェミニズムが普及しようと、たとえ少数派ではあれ、「女らしさ」にアイデンティティを持ち、また、それと同じではないが、「女だけが被害者」とは見ない女性たちはいるし、夫や子どもを喜ばせ、尽くすことの誇りと喜びを認める女たちもいる。「女の方が有利」とか「パパがかわいそう」と言う娘たちも多いし、多くのアンケート調査では、「生れ変るとしても女」と答える者は、多数を占めている。それと「雇用差別」とは、別次元の問題であり、女性の不利ばかりを強調する説は、現実を多面的に見ていないし、女性一般に対する不信と反感をさえ、もたらしかねない。

また、若い女たちは、同年の若い男を「あのコ」と呼び、はるかに年長の男に向かってさえ、「カワユい」などとさえ評したりする。かつては、こうした表現は、男が女を指して用いたものだった。そこにもまた、ひそかな優位の感

情と、そのもたらす「ゆとり」が暗示されるが、他面では、「男くさい」汗まみれの「格闘」や激しいスポーツへの、女たちの関心が強まっている。いずれも、「たくましさ」と魅力ある「あらあらしさ」が男たちに乏しくなった現実の、反映と解釈できそうである。

この状況に対する女の新しい「適応」には、さまざまなタイプがあろう。その一つは、もはや、「男らしさ」への期待を持たず、「無視」か「支配」の対象としてしか見ない方法である。だが、そこには、或る種のリスクが潜在する。男の自尊心と暴力性が、突如として別離または攻撃へと激発するかもしれないからであり、その限界値に気づかぬ女は、手ひどい報復を受ける。生物学的な攻撃性の抑圧に疲れ、「おとなしい」はずだった男が、「いじけ」の内攻の末に豹変する例は、むしろ、ふえている。

そこで、いっそう賢明なタイプの女は、男の「子どもっぽさ」と「愚かさ」・「滑稽さ」を、ゆとりをもって受け容れ、程よい「あしらい」と「おだて」のテクニックを使いこなしながら、男の生物学的特徴を抑圧することなく、「男らしさ」への期待に沿って「育てる」ことを、楽しめよう。他方、「弱く」なった男の側にも、「強い」女の「頼もしさ」に、むしろ憧憬にも似た敬意を持ち、母や姉に代る「甘え」の対象とする傾きが、現われている。こうして、「姉さん女房」がふえることは、自然な成り行きとなるわけである。

「弱くなった」男への苛立ちと、それをもたらしした精神的な優位の「ゆとり」は、とりわけ、新しいタイプの開放的な若い女性の一部に見られよう。すでに『関白宣言』（1979年）の歌への反応にも、それは兆していた。もちろん、末尾の「殺し文句」が有効なのだが、「少しは亭主関白ぶらせてよ」という懇願にも似た歌を、女たちは、むしろ好意をもって迎えたのである。まるで、息子なり弟なりの「腕白ぶり」や「駄々」を、微笑みながら面白がり見守る母か姉の態度に、似ている。

男たちが造った社会は、女たちに有利な条件を生み出した。が、遠未来では、弱さをさらけ出した男たちを、女たちが庇護したり鼓舞したりしながら、「育

てる」という新たな負担が生じるかもしれない。それもまた、歴史の弁証法的な可能性なのである。

もちろん、女の「社会進出」が進み「管理職」もふえれば、これまでは男に限られていた家庭外のストレスにもさらされよう。それは、一種の恒常的な「マージナル」層として受けていた、家庭内に「閉じ込め」られる屈辱と、しかした「庇護」からも解き放たれることの、代価である。ただ、その新たな社会的な負荷にも、女の生命力は、男よりも強く抵抗するかもしれない。それは今後、徐々に検証されよう。

こうして、現代の性別の「らしさ」は、複雑なものとなる。古い「らしさ」の慣性は今も強く、それを自然に内面化する者も、少なくないが、もちろん、その規範性を支える価値観自体が崩れ、「自分らしさ」以外に無関心な者もふえている。他方、「らしさ」への期待と本然の傾向とのギャップを意識して、性的アイデンティティの不確かさに悩む者も、「性的魅力」に乏しい異性に不満な者も、少なくない。

ただ、それにも拘らず、身体という所与から解放されることはない。そして、身体の生理は、意識的な統制の及ばぬところで、潜在的に働いているが、それが意識に抵抗しそれに逆らい始める閾値は、状況によって初めて露わとなるのであり、そのときになるまで、わかりにくい。

が、「らしさ」への接近の自己修練も、他者の期待の充足への努力も、演技も、それなりのプロセスを楽しむことができるし、達成感がある。「らしさ」の内容規定の選択範囲は拡がり、不安もふえるが自由もふえる。だが、もっともストレスが少ないのは、身体の生理に従い、また、他者の期待を程よく無視して、「自然に」振る舞う生き方だろう。

「らしさ」は、推量によって或る特質が内在すると判断されるものだが、その特質はおのずから外に表われることもあれば、「らしさ」を目標として自己をトレーニングし、近づこうと努めることもできる。だが、あるいはまた、目標との大きな距離を知りつつ、それゆえに、一時的にだけ「らしく」装い、演

じることでもある。それは、「らしさ」の規範性や他者によるその「役割期待」が、意識されるからにはかならない。その意味で、社会生活は、「ふり」の交換ゲームであり、人は互いに「ぶりっ子」なのである。

現代の「たをや男」も、「男っばさ」の習得または演技を試みて、日焼けサロンに通ったり、「男は」と「俺は」を連発し、女たちの「庇護者」ぶったりもする。「ますら女」も、化粧とダイエットに精出し、「ボディ・コン」の衣裳を身にまとい、コケットリイで男を「振り回す」ことができる。その「技術」を指南する雑誌特集も数多い。情報化と視覚文化の発達と孤独感の拡がりとは、「らしさ」の演技に長じさせる。

しょせん、「らしさ」と「役割」への期待は、主体と客体の個別的な組み合わせと状況に応じて、相対的であり、一面的・固定的ではありえない。期待そのものを拒否することも、もちろん自由だが、期待に応えたいと望むなら、その都度の「ふさわしい」振る舞い方を試みればいい。一貫した「らしさ」に、こだわる必要はない。「自分らしさ」とか「アイデンティティ」などというもの、永年に亘る一連の行為の軌跡から、結果として、おぼろげながら浮かび上がるにすぎないのである。

## Summary

# An Unfilled Space in Gender Studies

Sampei Koseki

First, gender theories have not sufficiently utilized the sociological role theory, though it should be liberated from the conservatism of structural-functionalism which was popular in the 1950's. It is evident that sexism was supported by an old-fashioned gender norm which exaggerated the inherent characteristics of each sex. But the mutual role expectation between a man and a woman in everyday life is defined by the individual images of each sex. Naturally these images are subjective and often irrational. Besides, the formation of reality cannot easily escape from the force of historical inertia. So it is natural that the individual consciousness cannot rapidly change.

Secondly, many men feel difficulty adapting themselves willingly to the changes of their female partners, and tend to find a shelter in the male friendship or have even antipathy against radical feminism. This is a hidden aspect of reality.

Besides, according to most of the physiologists, men are biologically inferior and weaker than women. The fact is that the aggressive attitude of women adds new stress to the men's stress resulting from the changing structure of industrial society where the value of muscle has been decreasing.

Now women should devise new tactics and techniques in order to help and animate the other sex whose spirits become lowered and often depressed if they wish to establish a better partnership with the weaker animal, men.